

学 位 論 文 要 旨

研究題目 (注：欧文の場合は、括弧書きで和文も記入すること)

Early Stage Clinical Characterization of Malignant Pleural Mesothelioma
(早期悪性胸膜中皮腫の臨床徴候)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 生体応答制御系

臨床腫瘍薬剤制御学 (指導教授 木島貴志)

氏 名 柘木 芳樹

【研究目的】

以前は治癒が極めて困難な疾患の一つと考えられてきた原発性肺癌の死亡率が現在では大きく改善しているのに対して、悪性胸膜中皮腫(MPM)は依然として極めて予後不良な疾患であり、診断後の生存期間中央値(MST)は約1年である。現在実施可能な治療選択肢の中で、さらに良好な生存期間を得る最も現実的な方法の一つとして、現状より早期にMPMを診断し治療介入することと考えた。そのような背景を踏まえて、診断時に胸膜病変も乏しく、FDG-PETで有意なFDG集積が認められないMPMを早期中皮腫と定義し、それらの症例の臨床徴候を明らかにすることを目的に後方視的に検討した。

【研究方法】

2007年4月から2015年12月までの間に病理学的にMPMの診断が確定し、IMIG分類で臨床病期がT0-1a/1bN0M0であった72例のうち、診断時にFDG-PETで有意なFDG集積(<2.5)を認めなかった40例を対象とし、その患者背景(年齢、性別、アスベスト曝露歴の有無)、診断経緯、胸水細胞診、組織型、予後などの臨床徴候につき、後方視的に検討を行った。

【研究結果】

全症例で胸水貯留を認めた。胸水細胞診でclassⅢ群の予後が不良であった。組織型では上皮型と比較して2相型が予後不良であった(今回検討した40例に肉腫型は含まれず)。手術様式は胸膜肺全摘術(EPP)よりも胸膜切除・肺剥皮術(P/D)が優れている事が示唆された。また化学療法単独群でも長期生存例が存在することが示された。

【考察】

今回の検討で胸水細胞診が陰性であっても積極的な胸膜生検が推奨されることが示された。また胸水貯留そのものが早期中皮腫のひとつの徴候であることが示唆された。良好な生存期間を得る最も現実的な方法として、現状より早期にMPMを診断し、集学的な治療介入を行うことは妥当であり、手術法に関しては、EPPよりもP/Dにおいて、よりsurvival benefitが得られることが示唆された。しかしながら今回検討した早期症例の中には化学療法単独で長期生存している特異な経過をたどる症例も少なからず存在しており、早期MPMに対して全例に集学的治療を導入するべきか否かは、十分に検討する必要があると考えられる。